55　佐賀出身江戸初期の医傑・向井元升（1609～1677）・貝原益軒の主治医・去来の父

木村専太郎
木村専太郎クリニック

一般に玄升（げんしょう）で知られているが，この元升は彼が50歳過ぎて長崎から京都に移った後に，それまでの名前の玄松（げんしょう）を改めたものである．

向井元升の出生

元升は慶長14年（1609）2月2日，肥前神崎郡酒村（さきむら）（現在神崎市千代田町）に向井兼義の次男として生まれる．

向井家の系譜

向井家は藤原鎌足（614–669）の末裔で，向井伊豫守兼信の代に，征西将軍懐義良親王に従い京から筑紫に来た．その後肥後国に住み，さらに肥前神崎に移っている．向井家は豪族であったが，次第に斜陽化し，父兼義は元升が9歳の元和3年（1617）のときに長崎に移住した．

元升の学問はじめ，医学を志す

元升は寛永7年（1630），22歳のときに南蛮天文学を習う．向井元升の興味は天文学から儒学へ移り，さらに元升は後世派の医学を学んだ．寛永14年（1637）の島原の乱後に，ポルトガル人は国外追放され，寛永17年（1641）に，平戸のオランダ商館は出島に移された．

正保4年（1547），元升が39歳のときに，長崎奉行が提供した立山の敷地に孔子廟（聖堂・学舎）を建立．（この聖堂はのちに，中島川のほとりに壮大な聖堂を再建され，「中島聖堂」と呼ばれた）さらに慶安元年（1648），元升は今籠町に私塾「向井社学輔仁堂」を開設．彼は後身の学問の発展や教育に熱心であり，次第に有名になり，さらに多くの弟子たちがこの塾に入門した．慶安4年（1651），元升が43歳の時に，次男の元淵（げんえん）（のちの去来）が誕生．

元升紅毛外科を学ぶ

元升は長崎では名医として知られ，大目付井上筑後守の命により，通詞西玄甫の助力で紅毛外科の修得を命じられた．九州大学教授ミヒェル氏は，日本医史学会に発表した資料をホーム・ページで公開している．それによると，当時の模様がオランダ東インド会社に残されているオランダ商館日記に見出せるという．元升が習った医師「アンス・ヨレアン」は，ドイツの上級外科医“ハンス・ユルゲン・ハンコ”で，ユルゲンはオランダ語で「ヨレアン」と呼ばれていた．ヨレアンは明暦元年（1655）の秋に来日，大目付井上筑後守は彼に，出島の商館で医学講義を行うように要請．その日本人医師代表に元升が選ばれ，明暦2年（1656）年の春から翌年まで，外科の講義を受けた．出島の商館医アンス・ヨレアンに紅毛外科を習った．そして彼はこの経験をもとに，に「紅毛外科秘要」を著わしたと言われている．

元升の名声

元升は，日本の内科学にも西洋の外科学いも造詣が深い非常に優れた医者に成長した．その知名度は九州一円に広がり，塾への入門者も多く，近隣の大名たちも元升を侍医に嘱望していた．

京都に上る

彼が50歳のときの夢のお告げに従い，京都に移り，ただちに評判の医師となり，皇族たちが進んで彼の診察を求めたという．元升はのちの博物学に相当する本草学にも造詣が深く，庖厨（ほうちゅう）備用倭名本草を出版したために本草学の父と言われている．黒田藩の貝原益軒はたびたび京都を訪れ，元升と交流している．向井元升68歳の1677年11月1日に京都で没した．京都市北部の真如堂に，次男の去来とともに葬られている．